地歴公民(世界史)　一橋大学　(前期)　1/1

＜全体分析＞

試験時間　120　分

解答形式
　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲいずれも論述式
分量・難易（前年比較）
　分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）
　難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）
出題の特徴や昨年との変更点
　400字３題の出題は不動である。2024年度は、分割された問題はなく昨年に続き400字３題の出題となった。Ⅰは欧州の中世・近世、Ⅱは欧米の近世・近代・現代史、Ⅲは近代・現代のアジア史の枠組みが定番となっている。資料の読解を含む問題が多く、2023年度はⅠで複数の史料が出題された。Ⅲでは従来近世以降の朝鮮・中国が出題されてきたが、今年度は10世紀から12世紀の東アジアが出題された。明清以前の中国史が出題されるのは2017年以来であった。
その他トピックス
　中世の東アジア史は、過去30年出題実績がない。Ⅰ・Ⅱについては過去10年、経済史的視点の問題が増加しつつある。

＜大問分析＞

番号	出題形式	出題分野･テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
Ⅰ	論述	中世都市の 社会経済史的意義	難解な資料を十分読み込んでから書くことが求められている。増田四郎の資料にある中世都市の「封鎖性」と「開放性」を把握できれば、ビュッヒァーの資料は理解できるだろう。こうした中世都市の意義は、ビュッヒァーの次の近世の社会や経済にどのように受け継がれていくかを念頭に置いて考えよう。	難
Ⅱ	論述	奴隷解放の問題点	現代の問題点から、過去の歴史を問う問題が近年顕著な傾向である。解放奴隷の視点から奴隷問題を扱うユニークな出題であった。指定語句の使い方が難しい。	難
Ⅲ	論述	10世紀から 12世紀における 東アジアの変動	10世紀からの東アジア史は意表をつかれたが、史料の読解もなく、落ち着いて取り組めば大きく点数を失うことはないだろう。「東アジア」をどこまでと捉えるかで、答案の作成は変わってくる。中国・北東アジア・朝鮮・日本は必須であろうが、ベトナム・雲南をどうするかは難しいところ。	標準

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

史料・資料問題の形式が定着しつつある。やはり日頃から史料・資料問題に慣れておく必要はあるだろう。今年度Ⅰで難解な史料の読解が求められた。難問が出題されることも多いが、細かい知識に偏るのではなく、基礎となる歴史理解の徹底につとめたい。文化史・社会史を含め基本となる通史はなるべく早く仕上げよう。そのうえで過去問研究を周到に行い、繰り返されるテーマに共通する事項・知識を確実なものとし、覚えるだけでなく、思考の材料として使えるようにしておきたい。

© 河合塾　2024年